



◎技の乱取りに真剣な表情で取り組むパレスチナの少年



◎終了ブザーが鳴ると、着子して格闘の息を喪する光景もあった



◎打ち込みを繰り返すパレスチナの少年。少しは多くのごきごきも吸収していただいていた



◎同級生の盛んなイスラエルの少年たちは、レベルも高かった



◎稽古を怠惰する山下理事長。「相手の立場に立って考えれば、見えるものも違ってくる。だからこそ、異文化交流は必要」と話す



◎正面をして礼。相手を助け、感謝する礼法を日本の少年たちとともに実践する



◎「最初は古習合がキムと英語を話したい。これからは英語を話していく」と話したイスラエルのユエリくん



◎パレスチナのアルカワスくんは「日本の文化に興味がある」「た、勉強して英語が話せたい」

パレスチナとの交流は、とてもいいことだと思う」と話した。

一方、体格も小柄なパレスチナ・チームは「国が貧しくて、柔道に取り組める環境にない」(山下理事長)と言う。日本の少年たちに苦戦していたが、それでも果敢に自分の技を試そうとしていた。13歳のマジド・アルカワスくんは「とてもいい経験になった」と、笑顔で語っていた。

——行は12月21日に広島平和記念資料館を訪れ、福岡に移動。技術指導を受けたり、観光を楽しんだ。そして、26日にグロ

ーバルアリーナで開催された第8回サニックス国際中学生柔道大会に参加。海外チームも含め、約80チームが出場した中、イスラエル・チームは3回戦まで勝ち進んだ。パレスチナ・チームは残念ながら1回戦敗退だったが、日本の少年たちとの交流を楽しんだよう

だ。来日スケジュールの最終日に催された「さよならパーティー」では、両国の少年たちが羽を翫んで歌を歌い、別れを惜しんでいたという。約2週間の日本滞在。柔道教育ソリグリエーの掲げた目標は、成功したと言えるだろう。

「柔道、スポーツを通して、いろいろな国の人たちが理解し合うようになってもらいたい」。山下理事長は願いを込め、そう話していた。



◎両国チームは約2週間、行動をともにして親交を深めた